

森
鷗
外

余
興



余

興

同郷人の懇親会があると云うので、久し振りに柳橋の亀清かめせいに往いった。

暑い日の夕方である。門から玄関までの間に敷き詰めた御影石みかげいしの上には、一面の打水うちみずがしてあつて、門の内外には人力車がもうきつしり置き列ならべてある。車夫は白い肌衣はだぎ一枚のもあれば、上半身全く裸らてい裡らていにしているのもある。手拭てぬぐいで体を拭ふいて絞しぼっているのを見れば、汗はざつと音を立てて地上そそに灑そそぐ。自動車は門外の向側に停め

てあつて技手ぎしゅは襟えりをくつろげて扇あふぎをばたばた使つてい
る。

玄関で二三人の客と落ち合つた。白のジヤケツやら
湯帷子ゆかたの上に紹ろの羽織やら、いずれも略服で、それが皆識し
らぬ顔である。下足札を受け取つて上がつて、麦藁帽子むぎわらぼうし
を預けて、紙札を貰つた。女中に「お二階へ」と云われ
て、梯はしごを登り掛かると、上から降りて来る女が「お暑
うございますことね」と声を掛けた。見れば、柳橋で私わたくし
の唯一人ひとり識つてゐる年増芸者としまであつた。

この女には鼠頭魚きすと云う譚名あだながある。昔は随分美しか

った人らしいが、今は痩せて、顔が少し尖ったように見える。譚名はそれに因って附けられたものである。もう余程前から、この土地で屈指の姉えさん株になっている。私には芸者に識合しりあいがあるろう筈がない。それにはどうして鼠頭魚を知っているかと云うと、それには因縁がある。

私の大学にいた頃から心安くした男で、今は某会社の頭取になっているのが、この女の檀那だんなで、この女の妹までこの男の世話になって、高等女学校にはいつている。そこで年来その男と親くしている私を、鼠頭魚は親類のように思っているのである。

私は二階に上がって、隅の方にあつた、主ぬしのない座布ざふ団を占領した。戸はことごと悉く明け放つてある。国技館の電燈でんとうがまばゆいように半空はんくうに赫かがいている。

座敷を見渡すに、同郷人とは云いながら、見識つた顔は少い。貴族的な風采ふうさいの旧藩主の家令と、大男の畑少将とが目に附いた。その傍そばに藩主の立てた塾の舎監をしてゐる、三枝と云う若い文学士がいた。私は三枝さいぐさと顔を見合せたので会釈をした。

すると三枝が立って私の傍に来て、欄干らんかんに倚よつて墨田すみだ川がわを見卸しつつ、私に話し掛けた。

「随分暑いねえ。この川の二階を、こんなに明け放して
いて、この位なのだからね。」

「そうさ。好く日和ひよりが続くことだと思ふよ。僕なんぞは
内にいるよりか、ここにこうしている方が、どんなに楽
だか知れないが、それでも僕は人中いんちゆうが嫌だから、久しく
こうしていたくはないね。どうだろう。今夜は遅くなる
だろうか。」

「なに。そんなに遅くもなるまいよ。余興も一席だから。」
「余興は何を遣やるのだ。」

「見給え。あそこに貼はり出してある。畑閣下が幹事だか

らね。」

こう云つて置いて、三枝は元の席に返つてしまった。

私は始て気が附いて、承塵なげしに貼はり出してある余興の目

録を見た。不折ふせつまがいの奇抜な字で、余興と題した次に、

赤穂あこう義士討入と書いて、その下に辟邪軒へきじやけん秋水しゆうすいと注して

ある。

秋水の名は私も聞いていた。電車の中の広告にも、武

士道の鼓吹者こすいしや、浪界ろうかいの泰斗たいとと云う肩書附で、絶えずこの

名が出ているから、いやでも読まざることを得ぬのであ

る。或る時何やらの雑誌で秋水の肖像を見た。芝居で見

る由井正雪ゆいしょうせつのように、長い髪を肩まで垂れて、黒紋附きものの著物きを著きていた。同じ雑誌の記事に依れば、この武士道鼓吹者には女客の鬘ひいきが多いそうである。

しかし男に鬘ひいきがないことはない。勿論もちろん不幸にして学生は墮落おらくして、ワグネルがどうのこうのと云って、女色じょしよくに迷うお手本のトリスタンなんぞを聞いて喜ぶのである。男の鬘ひいきは下町にある。代を譲せがれった倅せがれが店を三越まがいにするのに不平ふへいでいる老舗しにせの隠居もあれば、横町の師匠ししやうの所へ友達ともだちが清元きよもとの稽古けいこに往くのを憤慨ふんがいしている

若い衆もある。それ等の人々は脂粉しふんの気が立ち籠こめている。棧敷さじきの間にはさまって、秋水の出演を待つのだそうである。その中へ毎晩のように、容貌ようぼう魁偉かいいな大男が、湯帷子へこおびに兵児帯へこおびで、ぬっとはいって来るのを見る。これが陸軍少将畑閣下である。

畑は快男子である。戦略戦術の書を除く外、一切の書を読まない。浄瑠璃じょうるりを聞いても、何をうなづいてはいるやうにわからない。それが不思議な縁で、ふいと浪花節ななわぶしと云うものを聴いた。忠臣孝子義士節婦の笑う可べく泣く可べく驚く可べく歎たんず可べき物語が、朗々たる音吐おんとを以もつて演出せら

れて、処女しよじよのように純潔無垢な將軍の空想を刺戟しげきして、將軍に唾壺だこを撃碎する底ていの感激を起さしめたのである。焯はこの時から浪花節の愛好者となり、浪花節語りの保護者となった。

そこでこの懇親会の輪番幹事の一人にんたる焯が、秋水を請待しょうだいして、同郷の青年を警醒けいせいしようとしたのだと云うことは、問うことを須もちいない。

暫しばらくして焯の後輩で、やはり幹事に当っている男が、我々を余興の席へ案内した。宴会のプログラムの最初に置かれたものを余興と称しても、今は誰も怪まぬように

なっているのである。

余興の席は廊下伝いに往く別室であつた。正面には秋水が著座ちやくざしている。雑誌の肖像で見た通りの形装ぎようそうである。顔は極きわめて白く、唇は極て赤い。どうも薄化粧をしているらしい。それと並んで絞しぼりの湯帷子を著た、五十歳位に見える婆あさんが三味線を抱えて控えている。

浪花節が始まつた。一同謹んで拝聴する。私も隅の方に小さくなつて拝聴する。信仰のない私には、どうも聞き慣れぬ漢語や、新しい詩人の用いるような新しい手爾てに遠波をが耳障みみざわりになつてならない。それに私を苦めること

が、秋水のかたり物に劣らぬのは、婆あさんの三味線である。この伴奏は、幸にして無頓著むとんちやくな聴官を有している私の耳をさえ、緩急を誤ったりリズムと猛烈な雑音とで責めさいなむのである。

私は幾度いくたびか席を逃れようとした。しかし先輩に対する敬意を忘れてはならぬと思うので、私は死を決して堅坐けんざしていた。今でも私はその時の殊勝な態度を顧みて、満足に思っている。

義士等が吉良きらの首を取るまでには、長い長い時間が掛かった。この時間は私がまだ大学にいた時最も恐怖すべ

き高等数学の講義を聴いた時間よりも長かった。それを耐忍たいにんしたのだから、私は自ら満足しても好いかと思う。

ようよう物語と同じように節を附けた告別の詞ことばが、秋水の口から出た。前列の中央に胡坐あぐらをかいていた畑を始として、一同拍手した。私はこの時鎖くさりを断たれた囚人の歡喜を以て、共に拍手した。

畑等が先に立って、前に控所であつた室しつの隣の広間をさして、廊下を返って往く。そこが宴会の席になつていたのである。

私は遅れて附いて行く時、廊下で又鼠頭魚ねずずしに出逢つた。

「大変ね」と女は云った。

「何が」と真面目な顔をして私は問いかえした。

「でも」と云ったきり、噴き出しそうになったのを我慢するらしい顔をして、女は摩れ違った。

私は筵会の末座に就いた。若い芸者が徳利の尻を摘まんで、私の膳の向うに来た。そして猪口を出した私の顔を見て云った。

「面白かったでしょう。」

大人が小児に物を言うような口吻である。美しい目は軽侮、憐憫、嘲罵、翻弄と云うような、あらゆる感情

を湛たたえて、異様に赫かがやいている。

私は覚え^{はなは}ず猪口を持った手を引つ込めた。私の自尊心が余り甚はなはだしく傷きずけられたので、私の手は殆ほとんど反射的にこの女の持った徳利を避けたのである。

「あら。どうなすったの。」

女の目に映じているのは、前に異なつた感情である。それを分析したら、怪訝かいがが五分に厭嫌えんけんが五分であろう。秋水のかたり物に拍手した私は女の理解する人間であつたのに、猪口の手を引いた私は、忽たちまち女の理解するこゝと能あたわざる人間となつたのである。

私ははっと思つて、一旦引いた手を又出した。そして注がれた杯の酒を見つつ、私は自ら省みた。

「まあ、己おれはなんと云う未錬みれんな、いく地のない人間だろう。今己と相對しているのは何者だ。あの白粉おしろいの仮面の背後に潜む小さい靈が、己を浪花節の愛好者だと思つたのがどうしたと云うのだ。そう思うなら、そう思わせて置くが好いではないか。試みに反對の場合を思つてみる。この靈が己を三味線の調子のわかる人間だと思つてくれたら、それが己の喜ぶべき事だろうか。己の光榮にだろうか。己はその光榮を担になつてどうするか。それがなんになる。

己の感情は己の感情である。己の思想も己の思想である。天下に一人にんのそれを理解してくれる人がなくたって、己はそれに安んじなくてはならない。それに安んじて恬然てんぜんとしていなくてはならない。それが出来ぬとしたら、己はどうなるだろう。独りで煩悶はんもんするか。そして発狂するか。額を石壁に打ち附ぶけるように、人に向かつて説くか。救世軍の伝道者のように辻つじに立って叫ぶか。馬鹿な。己は幼穉ようちだ。己にはなんの修養もない。己はあの床の間の前にすわって、愉快に酒を飲んで、真率しんそつな、無邪気な、そして公々然とその愛する所のものを愛し、知行一

致の境界に住している人には、はるか迥に劣っている。己はこの己に酌をしてくれる芸者にも劣っている。」

こう思いつつ、頭を挙げて前を見れば、もう若い芸者はいなかった。それに気が附くと同時に、私は少し離れた所から鼠頭魚が私を見ているのに気が附いた。鼠頭魚は私の前に来て、じっと私を見た。

「どうなすったの。さっきからひどく塞ふさぎ込んでいらつしやるじゃありませんか。余興あに中あてられなすったのじやなくって。」

「なに。大ちがいだ。つい馬鹿な事を考えていたもんだ

から。」

こう云って私は杯を一息に干した。

日本文学電子図書館

阿部一族・舞姫

著 者：森 鷗外

作成者：宮澤一郎

出版社：新潮文庫、新潮社



日本文学電子図書館